

はじめに

日本産科婦人科学会会長 佐藤 和雄

20世紀も幕を閉じようとしている1999年（平成11年）に第51回日本産科婦人科学会総会および学術講演会を4月10日より13日までの4日間ホテルニューオータニで開催いたしますことはこの上ない光栄なことであり、この機会を与えて下さいました会員の皆様方に衷心より感謝申し上げます。

21世紀において産科婦人科学がどのような進歩展開を見せるか予想するのは困難ですが、生殖内分泌学、腫瘍学、周産期学を基本とし、そこに倫理的思考の加わった患者のための医療がさらに強く求められるようになると思われます。今回の学会ではその点を意識したプログラム作成を行いました。招請講演として文化勲章を受けられた早石 修先生に“アラキドン酸カスケード—最近の進歩から—”，また科学史に新しい視点を求め斬新な史観を展開しておられる村上陽一郎教授に“医学と医療のはざま”と題してそれぞれ興味あるお話がいただけるものと期待しております。特別講演は和歌山県立医科大学仲野教授により“生殖内分泌学におけるパラダイム・シフト”と題し、21世紀での生殖内分泌学の展開の予告を聞かせていただけるものと思っています。シンポジウムは2題であり、“卵巣がん化学療法の基礎と臨床”で現在臨床で最も切実かつ重要な問題が取り上げられ、また“母子間免疫応答の異常”で生殖免疫学の近年のトピックが論じられる予定です。教育講演は4題でその道のエキスパートの方々の講演で期待されます。会長講演では産婦人科医療における第2の火とも呼べるIVF-ETを代表とする不妊治療（ART）が我々の制御から離れ暴走しないことを願ってお話させていただきます。生涯研修プログラムは産科婦人科学とその医療の現況とその周辺の話題を取り上げました。とくにクリニカル・コンパスと称して約4.5時間を取り2題のテーマについて多角的視点から分析的な議論を行い、それを総合するような形の研修形式を試みてみました。一般演題は今回から応募10題制限が撤廃されたため、1,255題の応募がありそのうち987題が厳選採用となり、いつもより約170題多い発表が行われることになります。

日本産科婦人科学会の国際化の活動としてInternational Session（IS）が行われてきましたが、本年は日韓カンファレンス開催の年にも当たり、韓国、台湾、中国、エジプト、ドイツなど10カ国からの応募があり115題（国内21題・国外94題）の発表が予定され、優秀演題にIS Award（5題）、President Award（10題）が授与されます。上述したように本年は日本で第6回日韓カンファレンスが開催され腫瘍領域を主題として子宮頸癌、子宮内膜癌、卵巣癌それぞれに日韓からの1名ずつの演者による国際ワークショップ（IW）形式での発表が行われます。さらに米国、ドイツからそれぞれ2名ずつの各分野の権威の先生方（米国：K. J. Ryan, H. R. Behrman, ドイツ：W. Kuhn, P. G. Bockerhoff）をお招きしてMeet the Authoritiesという講演会も予定しております。

4日間という短期間で産科婦人科学とその医療の全貌を網羅することは不可能ですが、その一部でも会員の皆様に望見して頂ければ幸甚に思っております。担当校一同、多数の皆様のご参加を期待し、春爛漫の東京をお楽しみ下さることを祈念しております。